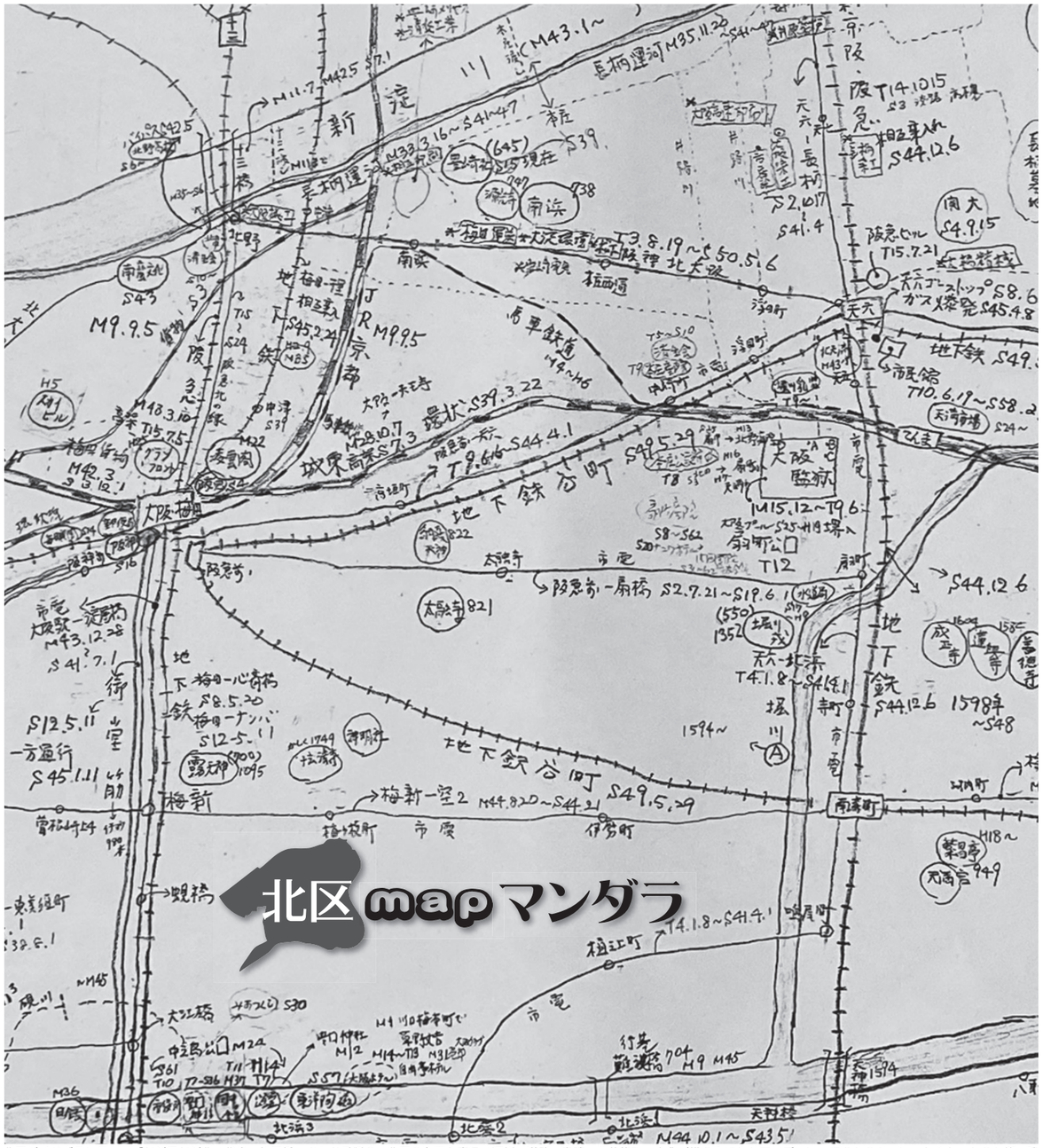
キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

つひまぶ 北区MAP号

つながるひとまちぶんか

2020 5月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.16　2020年5月1日発行　編集・発行：北区のおもろ通信団（編集長／浅香保ルイス龍太　編集スタッフ／秋山暁子・田口和成・棚橋真理・平井裕三・松岡慧祐）**協力：**大阪市北区・北区コミュニティセンター・奈良県立大学地域創造学部　**連絡先：**【mail】tsuhimabu@gmail.com　【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp（誌面に載せきれない情報はブログでね♥）　**定価：**0円　**主な配布場所：**大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンター・北図書館・大阪市住まい情報センター・大阪市北区社会福祉協議会・江之子島文化芸術創造センター・大阪市ボランティア市民活動センターほか多数（配布場所はブログにて随時お知らせします）
※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。



北区ガイドボランティア「ヤジ馬ヤジ北」代表・松田眞一さんお手製の、北区の主要な交通・河川・道路・寺院・公共施設・企業が描き込まれたマップ。いつできたのか、いつなくなったのか等、時間軸までもが平面に表現されている、すごいマップ。掲載された圧倒的な情報量は、好奇心と情熱のカタマリ！　いつまでも見ていられる。

ランニングが趣味です。ランニングコースをつくるとき、グーグルマップを使うと距離が計れて便利です。ストリートビューで妄想ランニングもできます。

50歳の手習いではじめた今の僕の趣味は、ランニングです。1日おきに10㎞を走っています。ランニングというのは習慣化しないとあまり効果がないし、習慣化しようと思えば、手頃なホームコースを設定しなければなりません。そこで最初は、地図とにらめっこすることになります。そんなとき、グーグルマップは簡単に距離を計れるので便利ですね。ストリートビューを使えば、実際のコースをオンライン上で試走することもできます。

僕は職住とも大都会・天満に暮らしているので、ホームコースは天満周辺に設定したいところです。しかし、ここは人も車も自転車も多いし、信号も多く、走るのに適した場所とは言い難い。かと言って、あまり離れたところにコースを設定してしまうと、そこまで行くのが大変だし、なにかあったときにすぐに戻れないのも困ります。そこで、マップを見ながら僕が目をつけたのが、近所の公園。

まずは扇町公園。扇町公園を計測すると、桜並木の外周が約0.7㎞なので、3周走ると約2㎞になります。水分補給したいときには周辺に自販機があるので、便利です。あと、公衆トイレもある。ただし、3周以上走りたいときは、途中で何周目かが分からなくなることもあるので、できれば場所を変えたい。そこで僕がマップとにらめっこしながら見つけ出したコースは、公園数珠つなぎコース。扇町と南森町のあいだには、南北に西天満公園、野崎公園、扇町公園が並んでいるので、それぞれを2周ずつ走ります。さらにJR天満駅を横切って与力町公園のグラウンド2周も加えると、約7㎞になります。僕は今、このコースを走ることが多いです。

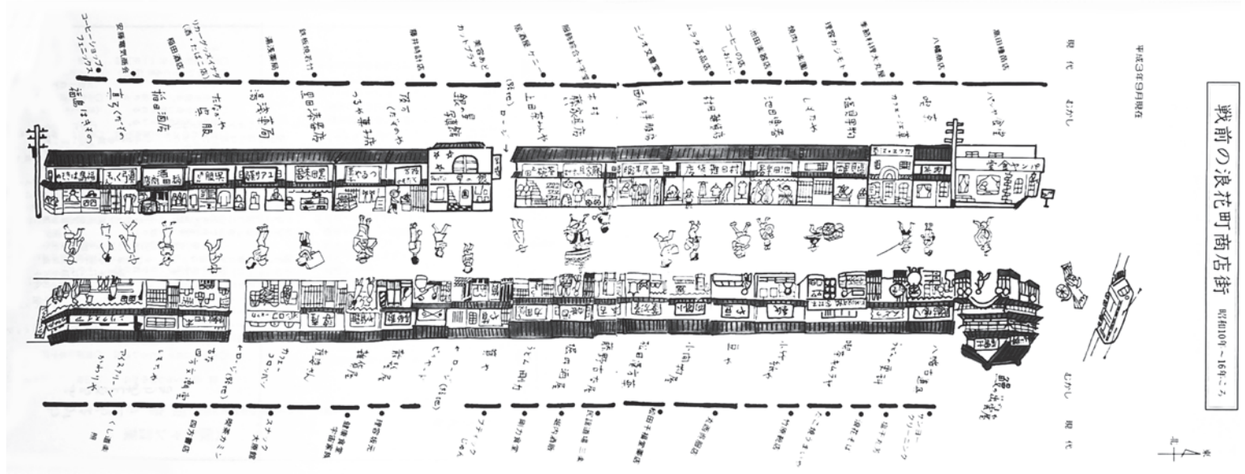
次にもっと長い距離を走りたいときには、中之島を1周します。マップで計測すると、東の剣先噴水から西端の船津橋を経て元に戻ると、1周約6.5㎞。2周すれば13㎞です。中之島だと信号がごくわずかなので、スイスイ走れます。ただし、ランニングできる道では、せっかくの水辺なのに、そんなに水を感じることができません。川が見えない箇所が多いのですね。

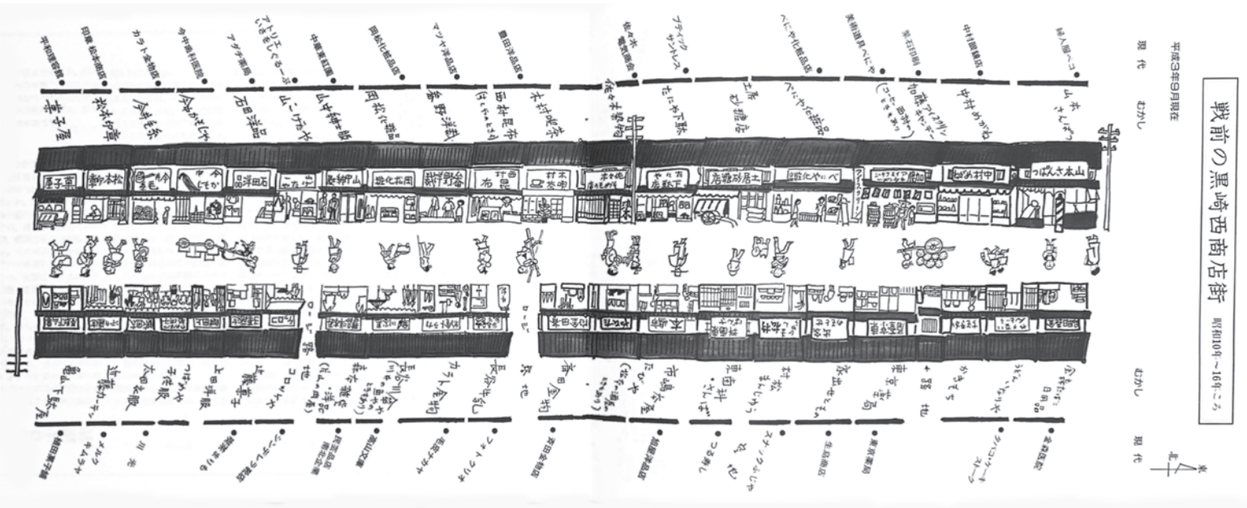
水辺を感じたいのなら、大川沿いが一番です。右岸の南天満公園をライオン橋（難波橋）から源八橋まで往復すると約10㎞。どちらも延々と水辺の気持ちのいい道を走ることができます。もちろん、往復せずに淀川を北上することも。マップで計測してみると、そのまま枚方まで約22㎞、さらに京都まで走ると約40㎞という恐ろしい数字がはじき出されます。でも、ストリートビューで試走するだけで、すでにとても気持ち良さそうな気も。いつか走ってみたいなと、マップ上で妄想ランニングに浸りながら、今日もホームコースを走るのです。（浅香保ルイス龍太）

編集後記

今回の特集テーマは「マップ」でしたが、私は社会学者として「マップの社会学」という未開の領域を研究しています。そもそも「マップ」とは、正確で均質な「地図」とは異なり、テーマもデザインも範囲も自由で、それゆえ一般市民がつくり手になり得るものであると考えています。今回取り上げたマップも、北区に住む住民が主体となってつくり出したものでしたが、そうした営みには、得てして人間の思いや物語が内在します。マップがつくられた背景、マップに込められたつくり手の思い、マップが地域社会にもたらした影響 …。本号で描き出そうとしたのは、このようなマップづくりのプロセスから見える地域固有のストーリーでした。マップの社会学が着目するのも、まさにそこです。近年は地図が急速にデジタル化＝機械化され、非人間的な側面を強めていますが、地域で見かけるなにげないマップにも、さまざまな人間の物語があるかもしれない。そんなことを想像してみると、マップの見方が少し変わるはずです。（松岡慧祐）

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebook「つひまぶ」よりご連絡ください。





天五中崎通り商店街　おいでやす

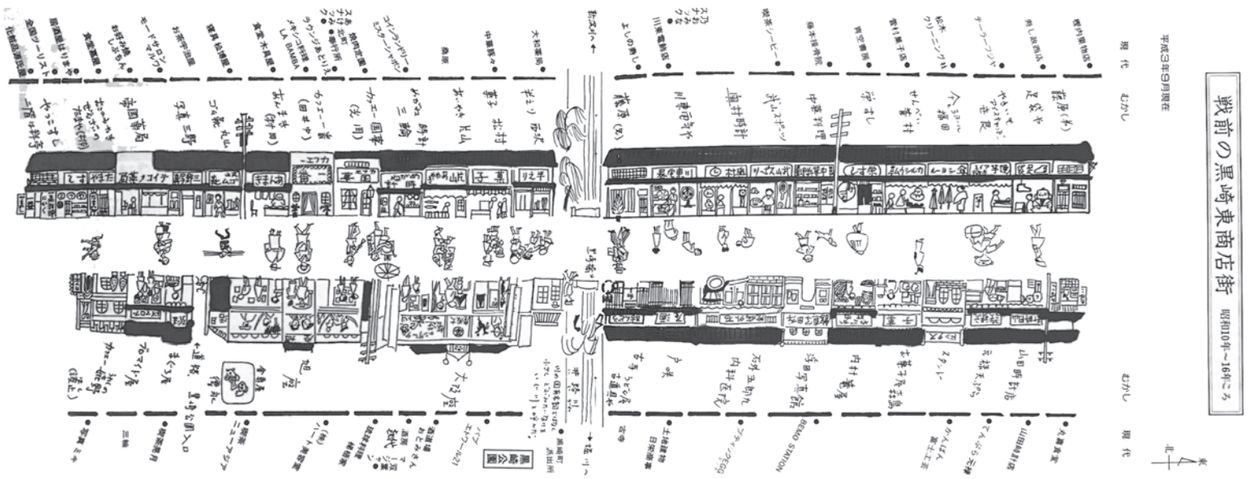
天神橋筋と中崎を結ぶ天五中崎通り商店街には、かつて古書店「青空書房」の名物店主である坂本健一さんがいました。休業日にシャッターに張り出される「ほんじつ休ませて戴きます」のポスターには、画家志望でもあった坂本さんの筆によるお地蔵さんや季節の風物などが描かれ、添えられた温かい言葉に勇気をもらった人もたくさんいました。2016年（平成28年）に93歳で大往生を遂げられましたが、今も、彼の不在を惜しむ声は多数聞かれます。

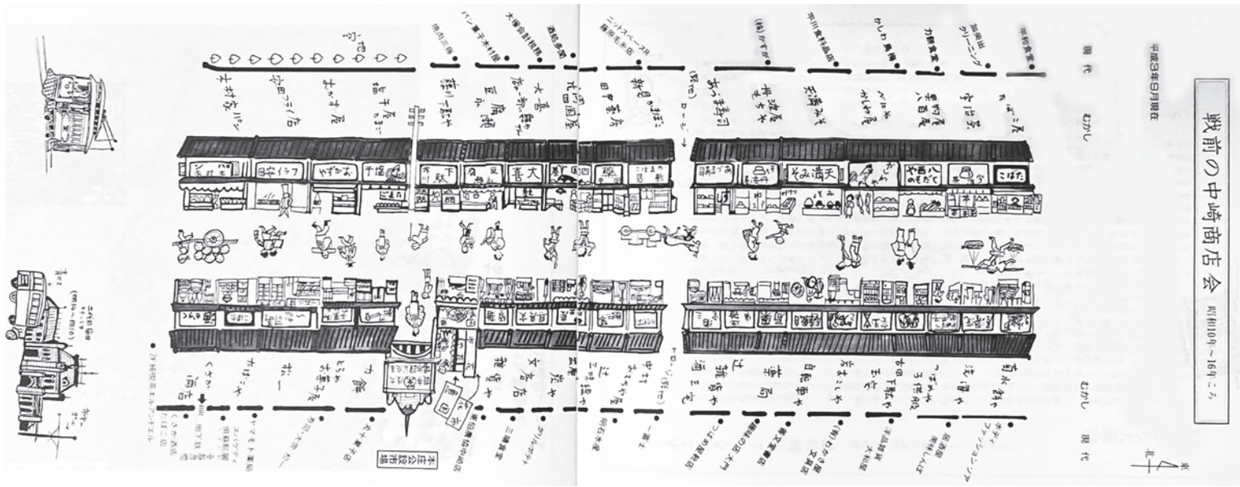
そんな坂本さんは、一方で、昔のまち並みを描いたイラストマップをたくさん残しています。1991年（平成3年）に発行された冊子『おいでやす ひとまち こころ』は、発行当時の商店街の様子と戦前の1935年～1941年（昭和10～16年）頃の様子が、対比するかたちで描かれています。なんと、ひとつひとつの店舗がすべてイラストで再現されていて、発行当時には〝現在〟だった商店街もすでに30年前のものになるので、今となってはすべてが貴重です。本庄公設市場や市電、2代目梅田すてんしょ（JR大阪駅）なども描かれており、これもまた、今となっては貴重な資料。

冊子の後半には、各店舗ごとにイラストによる店舗外観、連絡先、業種、キャッチコピーが掲載されています。物販店が多く、飲食店が並ぶ今の姿とは大きく違っていることをうかがい知ることができます。さらに、時代を感じる外観デザインを見ることができるのは、イラストマップならでは。資料収集だけで約10年、本業の古書店のかたわらにこつこつとイラストを描いて約3年、長い年月をかけて完成されたものです。

坂本さんが商店会長をしていた当時には、商店会会員向けにかわら版が発行されていたそうですが、それが冊子づくりのベースにもなっています。「天五中崎通り商店街」は4つの商店会に分かれており、坂本さんが商店会長をされていた黒崎東商店街を皮切りに、隣の浪花町商店街、さらには黒崎西商店街、中崎商店街と少しずつ取材され、店舗のイラストを描き、イラストマップを完成させていったのだとか。

この冊子が発行されたとき、当時のニュース番組「ニューススクランブル」が取材に訪れ、若かりし日の辛坊治郎さんが冊子と商店街を紹介しています。そのニュース映像によると、天五中崎通り商店街は大正初期に生まれた商店街ですが、この冊子が制作された当時は、どこか寂しいシャッター通りになっていました。かつての華やかなりし頃よ再びとの願いを込めて、戦前の商店街の様子をイラストで再現したと、坂本さんは言います。まちの古老に話を聞き、記憶の断片をパズルを組み合わせるようにしてつないでいき…。大空襲を免れた商店街では公設市場が炊き出しをおこなって飢えをしのぎ、映画館があり遊び場がありカフェがあり、まちに育った人にとってはここは心のふるさと、そんな商店街の姿を残したかったと、坂本さんはニュースのなかで語っています。





まちに育った人にとってはここが心のふるさと そんな商店街の姿を残したかった

「当時の天五中崎通り商店街はずっと底が続いていて、シャッター通りやったんです。そんな時代に商店会長をされておられた坂本さんは、きっと、商店街が少しでも上を向いてくれたらいいなとの思いで、この冊子をつくられたのだと思います」

と、後年、商店会長を務められ、現在は中崎北天満商工倶楽部・会長である青山隆一さんは言います。

「坂本さんも奥さんも天理教を信仰され、奥さんは分教会で活動されていました。〝人を助けて 我が身助かる〟の教えを守られ、お2人で熱心にまちのために活動されておられました。僕が会長を務めることになったとき、坂本さんのような先達の活動や思いは頭の片隅にありましたね」。

坂本さんが冊子に込めた思いは、後世のまちづくりの担い手へと引き継がれ、サイエンスカフェやおわら風の盆教室など、商店街独自のユニークな活動へとつながっていきます。（浅香保ルイス龍太）

児童事故死の教訓から生まれた、人と人をつなぐ地域の共通言語

後ろの開いたマップが児童用、手前の折り畳んだものが保護者用マップ。

「みんなで考えて、決めて、実行」マップづくりも地域のモットーで

2018年（平成30年）、中津小学校の児童（当時3年生）が、大型車両の巻き込み事故に遭い、亡くなられました。事故現場の見通しは悪くなく、そのショッキングな出来事に、地域は大きな悲しみに包まれました。しかし、事故から1年が経過した2019年（令和元年）5月、地域の恒例行事である「自転車安全講習」に参加した児童は、わずか12名。それは、多くの家庭が事故を自分事として冷静に受け止められていないことを示すものでした。一方、小学校PTAは、事故を受けて、「危険だと思う地点」について全家庭にアンケートを実施。特に通学路の交通安全や防犯に関する情報が多数寄せられました。しかし、アンケート結果は1年間放置されたまま、地域にフィードバックされることはありませんでした。

そんなときに、PTAの副会長に就任したのが、松本健さん。「講習をやるから来てね、というやり方ではなく、こちらからマップをつくって届けに行くというアプローチが必要だと感じました。最近ごく一部の世論で、PTAは要らない、という声もあるようですが、これこそPTAがやるべきことだと思ったんです」。そう語る松本さんは、普段はウェブ関係の仕事をしており、レイアウトやデザインのスキルがあったことから、アンケート結果をマップに落とし込む作業を担当することになりました。「それ以前に学校がつくっていた安全マップもありましたが、白黒の地図をベースとした簡素なもので、この見せ方では、子どもも親も見ないと思いました」。松本さんは、このような考えから、まずは子どもに興味を持ってもらい、子どもの態度から親の関心を引くために、写真付きで、多くのイラストを盛り込み、暖色を中心とした配色のマップをデザインしました。そして、子どもだけの取り組みにならないように、情報量を増やした保護者向けのマップも作成。各地点にQRコードが掲載され、そこからグーグルマップのストリートビューにアクセスでき、現場を疑似体験できるようにすることで、親子の会話のきっかけをつくりました。「マップをあえて児童用と保護者用に分けることで、子どもも親もそれを自分のものだと思うようになります。実際、男の子が道端でマップをひろげ、これ大事なやつやからな、とかばんにしまっている光景を目にしました。そうなれば、ここはマップに載ってたな、というような親子の会話が自然に生まれます」。

なかつあんぜんマップ

このような意図でつくられた『なかつあんぜんマップ』は、子どものいる全家庭に加えて、地域の役員や見守り隊にも配布されました。その結果、マップは親と子どもだけでなく、地域の人々をつなぐ役割を果たすようになっていきます。「地域のおじいさんやおばあさんにもマップを配ることで、それまでつながっていなかったPTAと地域のつながりができました。それから、学校との距離も縮まりましたね。学校からは、従来の安全マップもこんなものにしたかったんです。うまくやってくれはりましたと、感謝されました」と松本さん。そして、このようなマップのあり方を、松本さんは「地域の人々をつなぐ共通言語」と表現します。「これまで地域にはそういう共通言語がなかったんです。同じ地域に住んでいるのに、世代や学年で分断がありました。みんなで同じものを共有して何かをすることもありません。本来はお祭りが、その機能を担ってきたはずですが、今は縮小してしまっていますよね」。

今後は隔年で『あんぜんマップ』の最新版がリリースされるほか、来年は防災のための『あんしんマップ』を作成する予定で、マップを使ったイベントの開催なども検討中だそうです。児童の事故死というつらく悲しい出来事から生まれた1枚のマップが、今、人と人をつなぎ、地域を光の射す方へ動かそうとしています。（松岡慧祐）

地域の防災力が問われるようになった昨今、多くの地域で「防災マップ」がつくられるようになっていますが、北区でも避難所などを示した『北区防災マップ』が区役所によって発行されています。しかし、「北区」という広域的な範囲では、各地域の細かい防災情報まではカバーしきれず、地域住民が自分たちのための実用的な情報源として受容するのは困難です。そこで必要になるのが、北区では19地域に区分された連合町会ごとの詳細な防災マップ。その作成にいち早く取り組んだのが、北区最西端に位置する大淀西地域です。海抜がマイナス0.2m～マイナス0.5mと低い大淀西では、特に水害への対処が切実な問題になっていました。

マップ作成は、『大淀西地区防災計画』に基づいておこなわれました。これは、地域における防災の課題や方針などをまとめたもので、2017年（平成29年）に6回の会合を経て作成されました。これも区内で大淀西が最も早かったそうです。

大淀西地域安心安全防災マップ

旗振り役になったのは、大淀西地域活動協議会・会長の山崎英與さん。町会長も約30年にわたって務められ、「防災命」と称されるほど、地域の防災に心血を注がれている方です。「防災への意識は、いろいろやっているうちに自然に湧いてきたもので、特にこれといったきっかけはありません。とにかく何事も自分のことやと思ったらいいんです」と語るように、山崎さんにとって防災は、まずは自分を守るための、ごく自然な営みです。

そんな山崎さんによれば、大淀西のモットーは、「みんなで考えて、決めて、実行」。マップの作成も、このモットーに沿っておこなわれたそうです。まずは、分科会に分かれて、みんなで話し合い、あれもいる、これもいると、いろいろな意見を出し合いました。その上で、マップに救助用資材を掲載することになると、それがどこにあるかをみんなで調べたんです。避難ルートも町会ごとにみんなで決めました。いろいろな意見をくんで出来上がったのが、このマップです」。山崎さんがそう語るように、この防災マップは、地域住民によるボトムアップの集合知によってつくり出されたものです。連合町会ごとの詳細なマップとなると、そのような方法でしか成立し得ないと言ってもいいでしょう。

『防災計画』にも書かれているように、大淀西は地域内のつながりが強いといわれています。しかし、従来の防災訓練は、地域にある6つの町会のうち、第6町会しか実施していませんでした。そこで、2017年（平成29年）には、防災訓練を地域全体で実施し、その際に一時避難所などを決定。それが防災マップにも反映されています。そして、その防災訓練は、町会を混ぜておこなうことで、町会同士のコミュニケーションが図られました。

山崎さんによれば、「訓練にこれだけ人が参加する地域はない」と言います。それは、もともと地域のつながりが強かったからでもありますが、防災計画やマップの作成がコミュニケーションの契機となり、町会の枠を越えて人々がつながるようになった結果でもあるでしょう。防災計画の作成を機に考案され、マップにも掲載された大淀西のシンボルマークも、「みんなが仲良くなるきっかけのひとつ」だそうです。そして山崎さんが、「マップをつくって、自分のまちのことが分かりました。自分のまちがどんなまちかなんて、そんなことを考える意識はありませんでしたから」と話すように、防災マップは住民が地域を再発見するツールにもなっています。それによって、足りないものや情報も明らかになり、防災計画やマップの改訂も検討中とのこと。みんなで考えて、決めて、実行する大淀西の防災の取り組みは、これからもまだまだ続き、その輪をさらにひろげていくでしょう。（松岡慧祐）

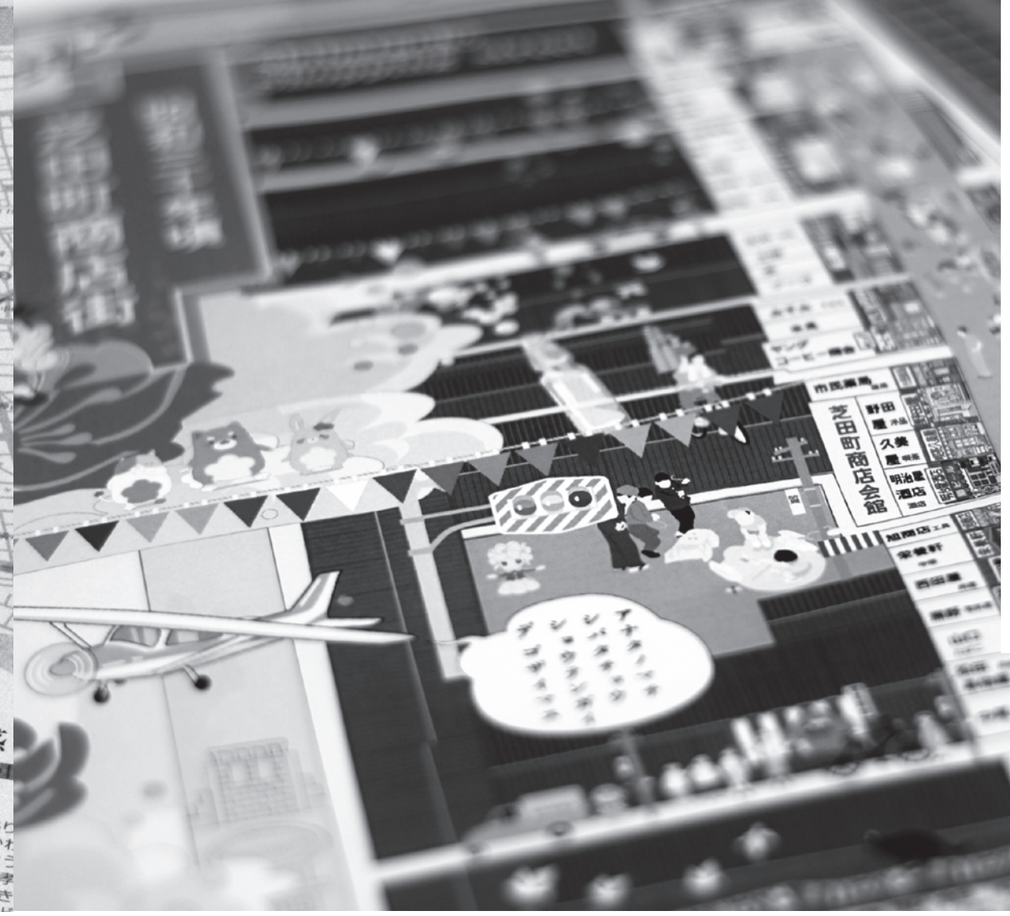
飛び込み取材もあたりまえ。
キタを愛する人たちの情熱が生んだガイドブック

近年、再開発によって大きく姿を変えている梅田エリアですが、今から約50年前にも、まちの分岐点となる大規模な開発事業が展開されました。阪急梅田駅の移設拡張工事です。かつて阪急梅田駅は、現在の阪急百貨店のあたりにありましたが、乗客の増加に伴い、1967年(昭和42年)から1973年(昭和48年)にかけて、現在の位置に移設するための工事を実施。それによって大きな影響を受けたのが、芝田町(現在の芝田一丁目)です。今は阪急の大阪梅田駅を含み、その北側に飲食店などが並ぶ芝田一丁目ですが、駅の移設以前は、路地があちこちに走り、八百屋や豆腐屋、電気屋、銭湯など、住民の生活に密着したさまざまな商店が軒を連ねていました。しかし、駅の移設に伴って、それまでの民家や商店は移転を余儀なくされる一方、1969年(昭和44年)には阪急三番街がグランドオープンするなど、一帯は「阪急村」とも呼ばれる新しいまちとして様変わりすることになりました。

昭和三十年頃 芝田町商店街

その際、芝田町商店街も新しい組織として再出発することになったのですが、その50周年記念事業として2019年(平成31年)に発行されたのが、『昭和三十年頃 芝田町商店街』と題されたイラストマップ。まだ駅が移設される前の芝田町商店街の街並みが再現され、すべての商店・世帯の名前が一軒一軒記載されています。監修したのは、芝田商店会・会長の三島保さん。当時小学生だった三島さんの記憶と古地図を元に、漫画制作の筑濱プロダクションが作画しました。三島さんのように、地域のなかに当時のことを知っている人は、もう数人しか残っていません。「このあたりは昔の家が残っているわけでもないので、地域に新しく移ってきた人も、昔のことに興味を持ちにくいと思います。そこで、自分たちがいなくなっても、昔はこんなんやったよと分かるように、このマップをつくったんです」と三島さん。それぞれの商店の軒先の風景、かつて路地で目にしたお地蔵さんや紙芝居屋なども、三島さんの記憶を元に細かく描かれています。「当時はコンビニもスーパーもなかったので、みんな商店街に買いに来ていました。この商店街だけですべてが揃いましたね。200人くらいが住んでいて、しょうゆや砂糖の貸し借りをするような近所付き合いもあって。夏祭りや盆踊りもやっていました。当時は駅から少し離れていたので、このあたりは、梅田の外れという感じでしたよ。三島さんがそう語るように、都会の繁華街という様相を呈する現在の街並みからは想像のつかない、地域コミュニティーが息づいていた頃の芝田のまちが、マップのなかで鮮やかによみがえっています。

このマップのほか、芝田を含む梅田東連合振興町会では、三島さんをリーダーに『梅田東アーカイブ地域史』を2014年(平成26年)に発行するなど、まちの歴史の継承に積極的です。三島さんは、その理由を、「この地域で生まれ育ったから、その記憶を後世に残したいと思うのは当然のこと」と語ります。そして、マップのなかの吹き出しには、こう書かれています。「アナタノマチ シバタチョウショウテンガイデ ゴザイマス」。そこには、多くの人がまちを去っていったなかで、芝田を〝わたしのまち〟として生き続けてきた三島さんの思いが込められているように思えます。「その当時から、まちは180度変わりました」。そう振り返る三島さんですが、こうしたまちの大きな変化が、三島さんにマップをつくらせたのです。それは単なるノスタルジーを超えて、誰かが語らなくては忘却されてしまう小さなまちの記憶をアーカイブする営み。そんなマップが後世に受け継がれ、自分の代わりに歴史を語ってくれることを、三島さんは願っています。(松岡慧祐)



イラストマップでよみがえる、梅田の外れにあった昭和のコミュニティーの風景

2010年(平成22年)発行の『北区小さな旅ぶっく まちと歴史を楽しむ8コース』。超人気まち歩き『北区ぶらぶら』の講師を務める北区ガイドボランティアグループ『ヤジ馬ヤジ北』が監修を務めるこの冊子は、北区全体を網羅したまち歩きガイドの決定版です。

「もともと、『ヤジ馬ヤジ北』は北区の歴史や文化を学ぶグループで、講演会や座学を中心に活動していたんですよ。10年ほど活動して、この冊子はその集大成なんです」と話してくださったのは、『ヤジ馬ヤジ北』の代表を務める松田眞一さん。「大まかに8つの地域を決めて、自分がやりたいところに手を挙げて、地域ごとに4、5人くらいの小さなグループをつくって、どんな内容にするのかを決めていきました」。松田さんご自身は、長柄から本庄、豊崎、中津までの地域を担当するグループに所属し、『淀川の風に歴史を感じるコース』をつくりました。「とにかく現地を歩くんです。寺社の由緒を直接うかがったり、歩いていて、あれ? どうしてここだけ道が曲がっているのかな? とか、この大きな木はなんだろう? と疑問に思ったことを、ご近所の方に聞くんです。インターフォンを鳴らしてね、飛び込み取材ですよ」と。歩いていると、地図を眺めているだけでは気づかない発見がたくさんあると話されます。そうやって、本庄西の神木の楠や中津の南蛮文化館を見つけたのだそうです。「みんな自分の好きな地域を選んでいるので、情熱があって、ワークショップは毎回けんけんごうごうでしたよ。みんなの調べてきたことをまとめて、グループ発表をするんです。ほかのグループの発表を聞くのも、とても参考になりましたね」。こうしてできた『小さな旅ぶっく』を元に、『ヤジ馬ヤジ北』はまち歩きをするようになりました。

北区小さな旅ぶっく

「まち歩きは大体2時間で、3km程度と決めています」。そのときどきの話題の場所や、参加者の特性によって新しいコースをつくることもあり、今では、この8コースを元に、組み合わせによっておよそ30ものコースが生まれているのだとか。コースをつくるといっても、時間や距離を考慮し、案内する場所を決め、資料を準備し、現場で話す練習をし、道順をたどって覚える…、準備は途方もなく大変です。毎回、研修と下見が欠かせません。「場所によって必ず案内すると決めている内容をメインに、ガイド本人の趣向も交えて案内するようにしているので、同じコースでもガイドによって違うものになるんですよ」。

『北区ぶらぶら』以外にも、昨年から、扇町小学校で校区を案内する授業を受け持つようになりました。「子どもに分かりやすく案内するために、社会の教科書を読み直しました。子どもにも、地元のことを知ってもらいたいですね」。また、企業OB会などからまち歩きのガイドの依頼があるなど、活動の場はひろがる一方です。

案内をしながら、参加者の記憶や思い出話などを聞くと新しい発見があるとも話されます。「興味を持って調べだしたらハマってしまって、終わりはありません。それもおもしろいんです」と目を輝かせる松田さん。移り変わるまちの様子を反映して、『小さな旅ぶっく』も発行から10年で三度改訂をしています。

「ガイドに地図は欠かせません。北区の地図は古代の想像図も含むと95あります。これを重ねていくと歴史が見えてきますよ」と、お手製のマップを見せてくださいました。「これは私の備忘録です。昔の地図や資料から年号を拾って、寺社や名所、もうなくなってしまった市電などが、いつできたのか、いつまであったのかを記録しているんです」。平面の地図に年号が記入されることで時間軸が生まれ、重層的なマップになっています。松田さんのなかでまとめられ整理されたまちの姿。この、見飽きることのない垂ぜんもののマップの一部は、表紙に戻ってぜひご確認ください!(棚橋真理)

昔の地図を探すとき、大阪市立図書館のデジタルアーカイブが便利です。大阪市立中央図書館が所蔵しているいろんな年代の地図のほか、古文書や写真、絵はがきなどの貴重な資料が無料で閲覧できます。画像を拡大して詳しく見ることもできるのはデジタルならでは！

北区銅像巡礼

露天神社のお初・徳兵衛像

お初天神の愛称でも親しまれる曽根崎の露天神社（つゆのてんじんしゃ）。その境内の一角に、「曽根崎心中　お初・徳兵衛」の像があります。お初が徳兵衛の手に手を重ね、寄り添う2人の姿。台座には「貴賤群集の回向の種　未来成仏　疑ひなき　恋の手本となりにけり」と「曽根崎心中」の最後の一節が刻まれています。

「曽根崎心中」は、1703年（元禄16年）に実際に起こった心中事件を題材にした、近松門左衛門の作品です。初演は文楽でしたが、のちに歌舞伎の演目にもなりました。「曽根崎心中」のヒットにより、心中現場となった天神の森があった露天神社は、ヒロインの愛称から「お初天神」と通称されるようになったのです。

お初・徳兵衛像がつくられたのは2004年（平成16年）のこと。文楽や歌舞伎の題材になるほど親しまれているとはいえ、心中したカップルの像なんて、そう簡単につくられるとは思えません。この像がつくられた経緯を、宮司さんにうかがいました。

「きっかけは、お初さんと徳兵衛さんのためにと200万円寄付された方がいらっしゃったことです」。

「その女性は、JR大阪駅前に闇市があった頃から商売を続けてこられた方だったそうで、当時は靴磨きなどもしておられたようです。商売をしまうのを機に寄付したいというお話でした。その方と知り合いで、曽根崎で熱心に敬神活動をしておられた氏子さんがいらっしゃったことがはじまりですね」。

その後、曽根崎心中から300年になるのを機に記念事業をしたらどうかという話が持ち上がり、当初寄付された200万円を元手に、さらに寄付を募り、お初・徳兵衛像をつくることになったのだそうです。像をつくるといっても、素材は何にするのか？　誰につくってもらうのか？　モデルは文楽人形にするのか、歌舞伎にするのか？　どんな姿の像にするのか？　などいろんな議案が挙がりました。

「曽根崎心中を自身の代表作としておられる三代目中村鴈治郎さんに相談しましたら、歌舞伎をモデルにされるなら協力しますとおっしゃっていただいたんです。そして、ご自身の初演のときの写真をお持ちくださったんですよ」と、その写真も見せてくださいました。写っている歌舞伎のいち場面は、まさに境内の像そのものです。こうして、曽根崎心中から301年目の2004年（平成16年）に、ブロンズ製のお初・徳兵衛像は完成しました。像が完成したとき、寄付者に配られた絵馬のなかには、像をつくるきっかけとなったお2人の名前が書かれています。「この像をつくる出発点となったお2人のことを残しておきたくてね」と話されます。

「露天神社は、1200年続く曽根崎の鎮守です。ご祭神でもない、まして心中した人の像を敷地内に置くことについてはもちろん賛否両論ありましたが、今では、みなさんにつくって良かったと言ってもらっています。像の手を見てください。たくさんの方に触ってもらって、真ちゅうのようにツルツルですよ」。

（棚橋真理）

駅探 えきたん

大阪 Osaka

清水太右衛門殉職碑

今から100年以上前の明治時代。大阪環状線（当時の城東線）が現在のような高架ではなく地上を走っていた頃、当時のJR大阪駅の西側には踏切がありました。あるとき、ひとりの少女が遮断機をくぐり、列車が迫る線路上に走り出ました。それを見た踏切番は、自らの命を顧みずに飛び出して少女を救出するのですが、その際、少女の命と引き換えに、自らは列車と接触し、殉職されるという痛ましい事故が起こりました。1906年（明治39年）5月31日の出来事です。

職責を全うしたこの鉄道員の死を後世に伝えようと、翌1907年（明治40年）10月に、この踏切の近くに殉職碑が建立されました。それこそが、「清水太右衛門殉職碑」です。

その後、1945年（昭和20年）の米軍による空襲で殉職碑は破壊され、しばらくはそのままの状態が続くのですが、清水太右衛門の50年忌を前に修復の話が浮上し、1956年（昭和31年）、現在の阪神高速11号池田線梅田出入口に2代目の殉職碑として再建されました。この碑には「新幹線の父」と呼ばれた国鉄総裁・十河信二の揮毫（きごう）により、「幼女の危急を叫びつつ遂に職に殉じた」と刻まれています。

しかし、せっかくつくり直された殉職碑ですが、移設された場所は、当時、貨物関係者以外はあまり足を踏み入れない場所だったので、この殉職碑の存在そのものが忘れられていた時期もあったそうです。

その後、JR大阪駅北側にある梅田貨物駅の廃止が決まり、駅周辺の再開発に伴って、殉職碑は2007年（平成19年）、駅北側の商業施設の駐車場に向かう接道の脇に移設されます。しかしこの場所も人通りが少なく、殉職碑が多くの人に知られることはありませんでした。

その後、2019年（令和元年）11月、なにわ筋線の延伸によるJR大阪駅の地下工事を機に殉職碑が三度目の引っ越しをしたことを知りました。現在は大阪中央病院の前のガード下に移設されており、鍵で施錠されていて、一般の人は殉職碑に近づくことができないようになっています。

この殉職碑について、JR大阪駅の密本善寛副駅長にお話をうかがいました。

「一般の方にはあまり知られていないこの清水太右衛門殉職碑ですが、JR大阪駅で働く駅員はみんな、清水太右衛門の名前を知っています。新人駅員が赴任したときや、清水太右衛門の命日である5月31日には、職員がこの殉職碑に赴き、手を合わせ、安全を誓います」。

何度か移設されてきた殉職碑ですが、今も胸に刻まれる存在であることには違いないようです。

現在、殉職碑が建てられている場所も仮の場所で、次の移設場所もまだ決まっていないとのことですが、この殉職碑は先代の功績を刻む貴重な遺産であり、次こそは安住の地を見つけ、これからも私たちの安全を見守り続けてくれることを願っています。

（平井裕三）

阪神梅田本店の地下と地上の工事中の壁に張られた、巨大な「北区防災マップ」。災害時には、梅田周辺にもたくさんの帰宅困難者があふれるでしょう。このマップを日頃から目にしていることで、いざというときの行動が変わればと願います。

キタのええもん　キタの手みやげ

聖・産・学の連携で生まれた大阪天満宮縁の梅サイダー「UME・TEMMA」

大阪天満宮といえば、学問の神様・菅原道真を祀った神社。菅原道真がこよなく愛した「梅」は、大阪天満宮の境内に植えられ、毎年2月には梅まつりでにぎわいます。

大阪天満宮と縁の深い梅を使って、2018年（平成30年）に誕生した梅サイダー「UME・TEMMA」をご存じでしょうか。

大阪天満宮さん縁の梅サイダーが売られている…そんな話を聞き、一度飲んでみたいと思っていましたが、ついに出会えたのが、昨年の12月25日、終天神（しまいてんじん）の日、大阪天満宮の境内でした。

毎月25日は天神さんの縁日。さまざまな神事がおこなわれ、多くの方がお参りに来られます。一年最後の12月は終天神と呼ばれ、絵馬の焚き上げがおこなわれます。

その傍らで、学生さんらしき2人が何かを販売しています。近寄ってみると「梅サイダーいかがですか？」と声がします。2人の前には、ぷっくりとしたボディーに梅のマークがかわいらしい瓶が並んでいました。

大阪天満宮の梅サイダー「UME・TEMMA」には、「天満天神の水」が使われています。

大阪天満宮境内の地下水は、江戸時代、「大坂四清水」のひとつ「天満天神の水」として愛されていましたが、戦後の都市開発や地下鉄の開通とともに枯れてしまったそうです。2013年（平成25年）、その復活に向けたプロジェクトが地元の天神橋筋商店街や関西大学と連携してスタート。地盤工学が専門の楠見晴重関西大学前学長の協力もあり、地下70mほどの層に良質な地下水があることが判明したのだとか。

天満天神の水の復活に取り組む岸本禰宜にうかがうと、天満天神の水は、ペットボトルに詰められ、販売されたり、ご祈祷に来られた方へのお下がりとして授受されたりしているそうです。

現在、天満天神の水が湧き出る井戸は、大阪ガラス業発祥の地・天満らしく、ガラスの祠のなかにあります。毎月、1日、10日、25日に祠が開かれ、参拝者は自由に飲むことができます。

天満天神の水は、超軟水。とっても柔らかな口当たりです。そしてこの水を使うと、旨味たっぷりの美味しい出汁が取れるそうですから、不思議です。

大阪天満宮界隈には、そばの出汁を取るための水として、わらび餅をつくるための水としてなど、実際に使っているお店もあるそうです。

天満天神の水を、より多くの方に知ってほしい―2015年（平成27年）、関西大学社会学部メディア専攻・黒田ゼミの学生さんにより、リブランディングの取り組みがスタートします。

パッケージデザインを考えたり、梅フレーバーを足してみたり、アンケート調査もおこないつつ、たどり着いた答えは、梅サイダー。協力企業を探したところ、ラムネで有名なハタ鉱泉（都島区）が手を挙げてくれたそうです。聖（大阪天満宮）、産（ハタ鉱泉）、学（関西大学）連携による「UME・TEMMA」の誕生です。

「UME・TEMMA」には、ありがたい天満天神の水が「ご利益がありますように」との願いを込めて5％配合されていますが、それを超える割合で配合されているのが、こだわりの梅果汁です。

この梅果汁をつくるのは、大阪天満宮の本鳥居を出てすぐ、氏子総代を務める梅干専門店「五代庵」。五代庵の梅干に使う梅を栽培している東農園（和歌山県）では、大阪天満宮の御神園をお預かりしているとのこと。

大阪天満宮と切っても切れない縁でつながる梅果汁が、たっぷり10％入った「UME・TEMMA」。ますますご利益がありそうです。

瓶のふたを開けて飲んでみました。炭酸飲料が少し苦手な私は、ほう！　とびっくり。これは、強炭酸ですね。シュワッと口のなかではじけた後、梅の爽やかな甘酸っぱさがパーッとひろがります。美味しい！

お酒を割るのに使うのもおすすめとのこと。芋焼酎と1：4で試してみると、芋焼酎に負けない濃縮された梅果汁と強炭酸がほどよく和らぎ…あ、これ何杯でも飲めるやつです（笑）

「UME・TEMMA」は、学生さん自ら営業に出て販売しています。瓶のかたちやロゴにはじまり、チラシやキャッチコピーと、販売時期やターゲットに合わせて都度制作。今年は、冬の売り上げアップを目指し、合格祈願の参拝客に向けたチラシをつくり、順調に売り上げています。

「UME・TEMMA」は、地域の人やまちとつながり、文化や歴史を知ることができる〝メディア〟のひとつと捉えています、と学生さん。

毎月25日の縁日には境内で販売しているほか、大阪MAIDO屋など天神橋筋商店街をはじめ、北区内のお店で出会えます。見かけたときは、ぜひ買ってください。（秋山暁子）

大阪天満宮の終天神で「UME・TEMMA」を販売する関西大学の学生さん

彼女とキタのラブストーリー
――第十六回――

今年3月末で北区西天満女性会会長を退任された

林 照子さん

北区西天満女性会で10年もの間会長を務められ、堀川戎神社の十日戎では境内で福娘と並んで福笹の授与もしている、生まれも育ちも西天満という生粋の西天満人、林照子さんにお話をうかがいました。

親と離れて疎開していた小学生時代

1934年（昭和9年）2月7日、西天満生まれ。

照子さんは、小学校に隣接していた西天満幼稚園から西天満小学校に入学しました。ちょうど、戦争が激しさを増していた頃でした。「私の少し上の先輩たちは集団疎開をしていましたが、私は、弟と一緒に母の実家がある赤目に疎開していました。家が商売をしていたので、両親は大阪に残って、子どもだけで疎開していたんです。危ないから大阪に帰ってはダメときつく言われていました」。それからは何年も、親元を離れて過ごしました。

「赤目では、小学校の遠足で滝登りがありました。赤目四十八滝には、遠足でなくても、学校の友だちと遊びで行っていましたね。気軽な遊び場でした。家では田植えや、稲刈りの手伝いもしました。開墾もしましたよ。ヒルにかまれたこともあります。今にして思えば、子どもの頃に赤目にいて良かったんだと思います。都会にいたらできない体験をたくさんさせてもらいましたから。それに、両親が大阪から食べものを送ってくれていました。戦争中でしたけれど、食べるのに困ったことはありませんでしたね。あれはきっと闇物資だったんだと思いますけど」。

戦火を逃れて穏やかな疎開生活を送っていたようにも聞こえますが、そんなことはありませんでした。

「ある日、赤目から出征する人たちの見送りがありました。子どもも呼ばれて、駅で旗振りをするんです。その日はたまたま、私と弟は行かなくてよかったんですが、その出征する人たちを乗せた列車に向けて、敵が攻撃してきたんです。列車と並行になって撃ってきたんですよ」。列車だけでなく、駅に見送りに来ていた人もみんな撃たれて亡くなったそうです。「担架なんてありませんから、戸板を担架がわりにして、みんな小学校の体育館に運び込まれました。体育館いっぱいに、亡くなった人の遺体が並んでいました」。そのなかには、照子さんと同じく大阪から疎開して来た女の子の姿もありました。「友だちだったんです。大阪でお医者さんをしている家の子どもでした。とっても仲良くしていたんです。ショックでした。私と弟は、見送りに行かなかったから無事だったんです。まちの人みんなでお葬式をしました」。

避難したはずの疎開先でも恐ろしい光景を目の当たりにした照子さん。大阪では、自宅の裏に爆弾が落ちて、家が焼けてしまいました。「大阪のことはラジオで聞いていました。大阪が焼けたと聞いて、恐ろしかったです。一緒に聞いていた祖母も混乱していました。ラジオでは、親がどうなっているのかまでは分かりませんから」。両親がどうしているのか分からない、不安な日々を送ったこともありました。「母がリュックを背負って赤目の祖母の家に現われたときは、本当にホッとしました」と、静かに語られるぶん、当時の覚悟がしのばれます。

子どもの頃に体験した戦争の記憶は、今でも鮮明だと話されます。「忘れたくても、忘れられないものですね」と。いつまで経っても、戦争にまつわることは嫌で、見るのも聞くのも避けてしまうほどなのだとか。

照子さんが故郷の西天満に帰ってきたのは、終戦の翌年、小学5年生のときでした。

「戦争が終わって、自宅を建て直したところに帰ってきました」。それからは一変、にぎやかな日々がはじまりました。

「父が営んでいた鉄工所には、田舎から出てきた住み込みの従業員が何人もいましたし、夜は夜で、ご近所さんも集まって酒盛りをしたりして。戦後でお酒なんてなかなか手に入らない頃でしたけれど、赤目から送ってもらったりしていました」。家が工場兼自宅だったこともあって、常にたくさんの人に囲まれていた照子さん。「私のこともね、父は地域の集まりか何かでご近所さんと相談して決めていたんですよ」。小学校卒業後、近所の質屋の娘さんと2人で船場高等女学校へ。その後、大阪樟蔭女子大学に進学しました。「父が、ここにしたよって言うんです。でも大学の試験は受けましたよ」と朗らかに話されます。「大学には制服があって、緑色のはかまに靴を履くか、スーツを着るかでした。はかまを選んだんですけれど、はかまに靴を履くのにどうも違和感があって。家を出るときは草履を履いて、通学の途中で履き替えていましたね。本当はダメなんですけれどね」と楽しそうに話されます。「大学で、地域以外の友だちができたんです。それがとても良かったですね」。

4年間、市電を乗り継いでの通学でした。当時、同じように西天満から大阪市立大学に通っていた人がいました。5つ年上のその男性と、照子さんは結婚します。「24か25のときです。もともと、親同士が仲良しだったんですね」。

「夫は、小さい頃から知っている、お兄ちゃんのような人でした。長男だったんですけれど、うちのお婿さんみたいになっていましたね」。当時としては少し遅めの結婚になったのは、両親が私を手元に置きたがったのもあるんですよ、とにっこり。仲良し家族には、その後、3人の子どもも加わりました。

西天満小学校の同窓会

「末の娘が小学1年生になった年に、担任の先生から同窓会のお手伝いをしてもらえないかとお声掛けいただきました。西天満小学校では、6年生が卒業した年の4月の終わりから5月の初めくらいに、卒業生だけを集めて同窓会をしています。小学校を卒業すると、私立の中学校に行く子もいれば、引っ越す子もいて、バラバラになるんです。でも、この同窓会にはみんな集まるんですよ。6年生の担任だった先生もお呼びして、卒業生からプレゼントを渡したりします。ちょうど先生も、卒業生の様子が気になる頃でしょう。茶話会をして、みんなでおしゃべりして、楽しむんです。私はその同窓会のお世話をしています。ひとりでお世話するようになって、もう40年以上になりますね」。声を掛けられたときには数人いた同窓会の幹事も、引退が続き、いつの間にかひとりでするようになったのだとか。

「私が幹事のお手伝いをするようになった当初は、その時々の話題の場所に出かけていました。電気会館でしたこともあります。お弁当持参で出かけていた時期もありました」。お弁当持参だなんて、まるで遠足のようです。「いつだったか、お寺に行ったんですけれど、さあお昼にしましょうとなったときに、お弁当持参のはずが、誰もお弁当を持ってきていなかったことがありました。そんなことってあるんですね。慌てて お寺の人に紹介してもらって、ご近所の小料理屋さんにお弁当を用意してもらいました。あれも本当に驚いて。忘れられませんね。それからは何でも確認するようになりましたね」と懐かしそうに話されます。子どものアレルギー問題や、人数が増えたこともあり、幹事が食事の手配をしたり、お弁当を持参することはなくなり、同窓会は次第に茶話会に移行していきました。「そうしたら、当時の校長先生が、茶話会なら学校でしたらいいよとおっしゃってくださったんですよ」。その日ばかりは、卒業生と6年生の担任だった先生だけでなく、教頭先生、校長先生も集まるのだそう。「今では卒業生の親御さんや、PTAの役員の方も手伝ってくださいます。ずっと続いてきたことですから、絶やさず続けていきたいですね」。いろんな苦労やトラブルもあとになれば笑い話、と楽しそうに話されます。そんなふうにおおらかに受け止めてくれる照子さんだからこそ、親御さんや学校関係者の方々も気持ち良くお手伝いしようという気になるのでしょう。

堀川戎神社の十日戎

「同窓会は40年続けていますけれど、地域の活動は、続けることが大切です。1、2回参加するのではなく、続けて参加するんです。そうすると、だんだんとその活動の専門のようになっていきますね。西天満にはいろんな専門の人がいます。お互いに手伝いもしますし、説明も受けます。でも肝心なことはその専門の人たちが決めるんです。それぞれの持ち場がありますから」。西天満は役割分担がしっかりしているまちです。

また、「西天満は子どもが中心です。子ども中心に物事を決めたり進めたりしますね。同窓会以外にも、老人会が主催して、年に一度、親子で昔の遊びをするふれあい活動もあります。女性会で参加して、羽根突きやこま回しやかるたを子どもたちに教えたりするんですよ。私はこま回し担当です。他にも、餅つきを主催してくれている人たちや、毎朝小学生の登校の見守りをしてくれている人たちもいます」と、子ども向けの取り組みにもいろんな主体があり、それぞれ中心になる専門の方が主導して活動を続けているのだそうです。専門の人たちを尊重しつつ、互いに協力する体制ができています。

照子さんの専門は、女性会の活動です。

「女性会に入ったのは、お友だちが女性会に入っていたからなんです。そのお友だちの義理のお母さんが、当時の女性会の会長をしていたんですね。PTA活動もやりながら、女性会の活動にも参加するようになりました。堀川さんの十日戎の奉仕もずっと続けています」。

堀川戎神社の十日戎では、照子さんの属する堀川戎婦人会は拝殿のすぐ左手という好立地に構えています。「十日戎の3日間は朝8時から夜11時まで、笹にお飾りを付けて、お神楽を鳴らしています。お客さんがたくさん来ます。とっても楽しいですよ。みんなで仲良く、協力してやっています。90歳を超える先輩も3日間しっかり来てくれます。笹にお飾りを付けて、福を授けさせてもらって、今年もがんばろうっていう気持ちになります。年が明けるとみんな、今年も元気に堀川戎さんに行けるわ！って楽しみにしています。十日戎の間は、寒さも不調も感じません。パワーが違いますね」。十日戎の熱が伝わってくるようです。「あなたからもらいたい！って指名を受けることもあります。去年、うちの笹を飾って、この一年商売が調子良くいったと言ってもらえると、うれしいですね。私たちも、福を授けさせてもらうことで、ご縁をもらうんです。福を授けさせてもらうって、とっても幸せなことですよ」。終始、ふふふとにこやかな笑顔で話してくれた照子さん。

「次の十日戎に向けて、笹の準備はもうはじめているんですよ。残り福の1月11日が終わったらもう次の準備に入るんです。ぜひ来てください！」と言われると、早くも十日戎に気がはやるのでした。（終）

これまで続いてきていることを
絶やさず、
できるかぎり
続けていきたいんです。

聞き手・書き手／棚橋真理　撮影／浅香保ルイス龍太